

# 研究紀要

## 第29号

- |  |  |
|--|--|
| 奥東京湾東岸地域における関山・黒浜式期の貝塚                   | 古谷 渉                                     |
| 磨製石斧の材料と加熱処理(2)                          | 大屋 道則                                    |
| 川越田遺跡の手握ね土器と祭祀(3)                        | 福田 聖<br>赤熊 浩一<br>岡本 千里<br>澤口 美穂<br>大屋 道則 |
| 埼玉県の新輪棺墓                                 | 宮村 誠二                                    |
| 埼玉県における横穴式石室の石材加工について                    | 青木 弘                                     |
| 埼玉県における古代火葬墓—武蔵型甕を蔵骨器とする火葬墓を中心に—         | 西田真由子                                    |
| 常陸国南部における古代寺院の展開<br>—国分寺軒瓦の分布から見た寺院の在り方— | 梶間 孝志<br>宮原 正樹                           |
| 武蔵型板碑における種子規模の変遷について                     | 砂生 智江                                    |
| 「毛塚の石仏」と初発期陽刻図像板碑                        | 村山 卓                                     |

2015

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 第1号住居跡貝層検出状況(南から)



5 「ヌ」グリッドコア4 45層(焼貝層)



2 「ネ」グリッドピット6検出状況(東から)



6 「ヒ」グリッドコア5 焼土・焼貝層断面



3 「ヌ」グリッドコア4 貝層、焼土・焼貝層断面



7 ピット5貝検出状況

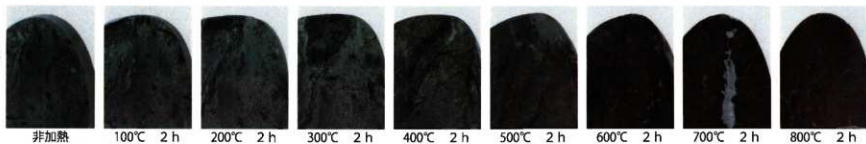


4 「ヌ」グリッドコア4 44層(焼土層)、87a層(焼土・焼貝層)

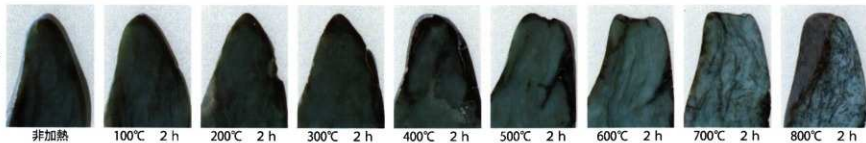


8 ピット5断面

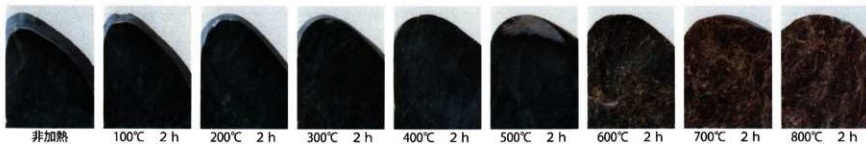
資料  
1



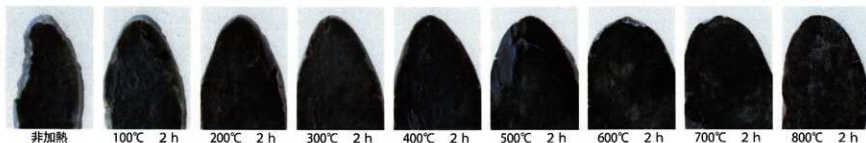
資料  
2



資料  
3

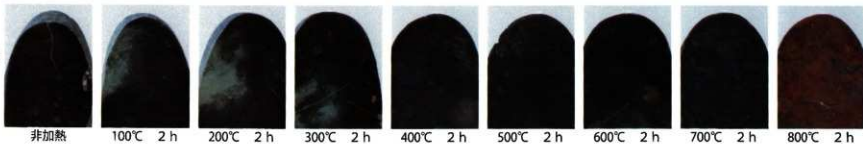


資料  
4

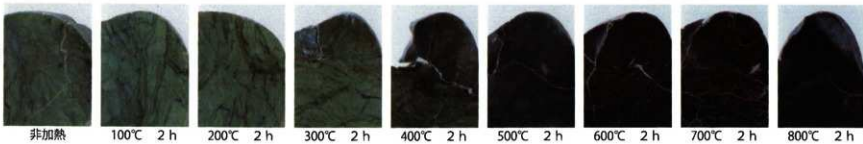


卷頭圖版 3 (大屋)

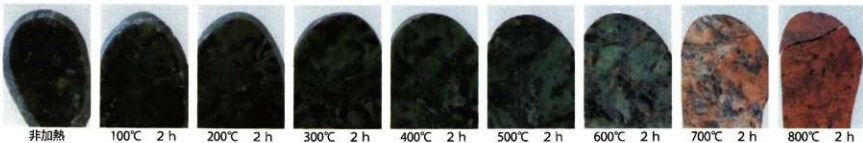
資料  
5



資料  
6



資料  
7





1 東松山市 毛塚の石仏 (全景)



2 東松山市 毛塚の石仏 (側面)



3 東松山市 毛塚の石仏 (部分)



2 川島町 長楽の石仏 (部分)

# 目次

巻頭図版

序

- 奥東京湾東岸地域における関山・黒浜式期の貝塚…………… 古谷 涉 (1)
- 磨製石斧の材料と加熱処理 (2)…………… 大屋道則 (17)
- 川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀 (3)…………… 福田 聖  
赤熊浩一  
岡本千里  
澤口美穂  
大屋道則 (19)
- 埼玉県の埴輪棺墓…………… 宮村誠二 (37)
- 埼玉県における横穴式石室の石材加工について…………… 青木 弘 (51)
- 埼玉県における古代火葬墓 - 武蔵型甕を蔵骨器とする火葬墓を中心に -  
…………… 西田真由子 (81)
- 常陸国南部における古代寺院の展開 - 国分寺軒瓦の分布から見た寺院の在り方 -  
…………… 昼間孝志  
宮原正樹 (91)
- 武蔵型板碑における種子規模の変遷について…………… 砂生智江 (109)
- 「毛塚の石仏」と初発期陽刻図像板碑…………… 村山 卓 (123)

## 埼玉県 の 埴 輪 棺 墓

宮村誠二

**要旨** 本稿では、古墳時代の墳墓の一種である埴輪棺墓を研究対象として取り上げた。埴輪棺墓をめぐるのは、先行研究が類例の多い近畿地方を中心に展開されてきたことから他地域での研究が少なく、いまだ資料の実態すら把握されていない地域も多い。とくに関東地方では類例が多数存在することが知られているにもかかわらず、これまでまとまった研究がほとんどなく、この地域の埴輪棺墓には不明な点が多い。

本稿では、埼玉県内で検出された埴輪棺墓を集成し、特徴を明らかにした上で、被葬者像を検討した。

その結果、埼玉県では埴輪棺墓の被葬者の多くが乳幼児や小児である可能性を指摘でき、その中には埴輪生産に関わる集団の構成員も含まれていたことが窺えた。さらに、被葬者（もしくはそれが属する集団や一族）の職掌を象徴する器物として埴輪が棺材に利用されたことも考えられた。

### はじめに

古墳時代には多種多様な墳墓がつくられた。本稿で検討対象とする埴輪棺墓もその一つであり、古くから特徴ある墳墓として知られてきた。内部に埴輪棺を納めたこの小規模な墳墓は、古墳時代を通してつくられた。類例は東北地方から九州地方に至るまで広域に分布し、とくに近畿地方に偏在することが知られている。古墳の周辺につくられることが多く、しかも、隣接する古墳を意識した配置や方位をとるものが多く認められることから、古墳に対して従属的であると評価されることも多い（近藤 1983 ほか）。

ところで、1920年代に開始された埴輪棺墓の研究には、すでに1世紀近い研究史が存在する（註1）。その研究史上、とくに重要な位置を占めるのが橋本博文の研究である。橋本は、全国の177例に及ぶ埴輪棺を集成し、その特徴を整理した上で、年代や起源、葬法等を検討し、被葬者像を考察した（橋本 1980）。

この研究は埴輪棺をさまざまな角度から分析しており、学ぶべき点が多い。以後の研究での引用頻度は高く、その影響力の大きさからも画期的な研究であると評価できる。

なお、論文中において橋本は、埴輪棺と同様の要素が岡山県宮山墳墓群などで検出された弥生時代後期の特殊器台棺などに認められるという重要な指摘をおこなっているが、特殊器台棺と埴輪棺との関係については、その後、間壁葎子や清家章が検討しており、前者が後者の祖形である可能性の高いことが指摘されている（間壁 1995、清家 1999）。また、橋本が埴輪棺墓の被葬者を埴輪製作集団と関連づけて理解した点は、その後の研究においても多くの支持を得ており、1990年代の半ばには、こうした理解が「常識化」していたようである（間壁 1995）。

1980年代後半～1990年代には、資料の大幅な増加をうけて多くの研究成果が蓄積された。なかでも類例の多い近畿地方では、特定地域や個別遺跡を対象とした研究が盛んに行われ（笠井 1987、坂 1994、櫻井 1994、石井・有井 1994、石井 1995、小宮 1995、有井 1996）、その様相が把握されてくると、それらを踏まえた総合的な研究も見られるようになった。

田中涼子は、近畿地方を中心とする地域の埴輪棺と古墳との関係を検討してその従属性を論じ（田中 1997）、川口修実は、畿内における埴輪棺

の展開を詳述し、埴輪棺の定型化の過程をあどづけた(川口2000)。また、清家章は、埴輪棺墓を埋葬場所や埋葬形態の違いにより集団墓型、周辺埋葬型、独立墳墓型の3型式に分類し、各型式の性格や被葬者像を検討した(清家1999)。これらの総合的な研究は、いずれも近畿地方の埴輪棺墓を考える上で看過できない魅力ある結論を導き出しているが、なかでも清家が周辺埋葬型や独立墳墓型の埴輪棺を土師氏あるいは埴輪製作工人とは無関係であると結論づけたことは、「常識化」していた被葬者に対するそれまでの理解に一石を投じる重要なしごとであった。

こうして近畿地方での研究が一定の到達点に達すると、従来あまり取り上げられることのなかった近畿地方以外の事例にも研究者の目が向けられるようになった。近年は中国・四国地方の事例が近畿地方との関係で注目されているほか(野崎2002・2011、高橋2010)、関東地方でも栃木県の事例が集成・検討され、その特徴が明らかにされている(宇都宮市教委2013)。

このように埴輪棺墓の研究史を顧みると、従来の研究が類例の多い近畿地方を中心に展開されてきたことが知られる。一方、近畿地方以外の地域を対象とした研究はいまだ低調であり、とくに関東地方では、多くの類例が存在するにもかかわらず(註2)、まとまった研究がほとんどなく、資料の実態すら把握されていない地域も多い。当該地域で埴輪樹立が盛行する古墳時代後期の埴輪棺墓の評価がいまだ明確でない状況にあるのもこうした研究動向によるところが大きく、各地の実態把握を目指す地域研究が急務である。

そこで本稿では、この課題を克服すべく、関東地方に属する埼玉県の埴輪棺墓を取り上げ、特徴を明らかにするとともに、被葬者像を検討し、その評価を試みる。

## 1. 埼玉県における埴輪棺墓研究の課題

前章では、研究史を検討し、近畿地方以外での研究の遅れを指摘するとともに、各地の実態把握を目的とする地域研究の必要性を説いた。

では、本稿で検討の対象とする埼玉県の埴輪棺墓についての研究は如何なる状況にあるのだろうか。具体的な事例の分析に入る前に、埼玉県の埴輪棺墓についても研究史を辿り、現状での課題を明確にしておく必要があるだろう。

さて、埼玉県における埴輪棺墓の研究は、1978年に金井塚良一が『吉見町史』において同町久米田古墳群3号古墳址の外側につくられた埴輪棺墓を取り上げ、そこに納められた埴輪棺の法量が1.5mに満たないことから、被葬者が成人ではない可能性を示唆したところから始まる(金井塚1978)。そして、これ以降、県内での類例の増加に伴い多くの研究者が埴輪棺墓への関心を示すようになる。

1986年、瀧瀬芳之は古墳群中で埴輪棺墓と箱式石棺墓が検出された寄居町の小前田古墳群の報文中においてこうした墓の被葬者の性格を考察した。瀧瀬は、埴輪棺が埴輪工人集団と関係が深いとする橋本博文の考えや埴輪工人集団の一部が埴輪祭祀の衰退に伴い、須恵器生産などの担い手になるという野上丈助の意見を参考に、小前田古墳群における埴輪をもたない埋葬施設の被葬者が、こうした焼物づくりを職業とする集団の成員であった可能性を想定した。また、小前田古墳群において埴輪棺墓から箱式石棺墓への移行が認められることは、「埴輪工人であった集団が質的变化をとげた現れであり、その集団が時を経て末野窯跡群を形成した工人集団となった可能性は大いに考えられよう」と被葬者についてより具体的に論じた(瀧瀬1986)。

1987年には、『埼玉県史』において増田逸朗が埴輪棺について解説し、円筒埴輪を2本合わせて使用する例が多いことや埋葬位置が墳麓や周



溝内が一般的であることから、その古墳の第一義的埋葬施設ではなく、副次的なものといえることを指摘し、また、大きさが円筒埴輪を2本合わせても1m足らずであることから、これらが主に幼児用の棺であった可能性を想定した(増田1987a)。

また同年、若松良一は比企地方における埴輪の受容と展開を論じる中で埴輪棺に触れ、これらが6世紀前半を中心とした時期に用いられたことを指摘した(若松1987)。

1993年には大和修により杉戸町目沼10号墳出土の円筒埴輪棺が報告される。大和はこれに伴い、11遺跡13例の埼玉県内出土の埴輪棺を集めている(大和1993)。

1996年、下手計西浦遺跡の埴輪棺墓を検出した永井智教は、被葬者について棺体となる埴輪の大きさや内法容積から乳児～幼児の年齢層が想定できるとし、軸方向の類似性や占地からは、隣接する古墳の被葬者と同一集団で、集団内でも家長階層となるべきはずの人物が相応しいことを指摘した。また、当遺跡の古墳群における埴輪棺墓の採用は、埴輪製作者との関わりで理解すべき問題であるとして、当古墳群が埴輪製作等に関わる人物を含む集団によって営まれたことを想定した(永井1996)。

2005年、長瀬歳康は、埴輪棺墓を含む埼玉県内の小型埋葬施設を検討し、墓域構成や長軸1.5m以下に収まる規模からみて、これらには中心埋葬の被葬者と血縁関係やそれに近い同族関係にある一族の子弟、あるいは特定の社会的階層を与えられた位置を持つ小児埋葬や改葬に関わる特殊な埋葬形態としての系譜を辿ることも考えられるとした。また、埴輪棺墓が埋葬される被葬者の年齢や身長に対応する規模で構築された埋葬施設である可能性を指摘した(長瀬2005)。

なお、こうした遺構研究以外に、近年は埴輪の器面調整痕である刷毛目の分析(同工品分析)を

武器とする埴輪生産・供給体制の研究の進展により、棺材となった円筒埴輪の供給関係も明らかになってきている(城倉2008、伝田ほか2011)。

以上、埼玉県での研究史を顧みると、やや断片的ではあるが、1970年代から現在に至るまで研究が行われてきており、すでに一定の蓄積があることがわかる。論点も当初は専ら被葬者像の追究であったところから、近年は、埴輪の生産地分析の進展に伴い、埴輪棺の供給関係も明らかにされつつあるなど多様化しつつある。ただし、これら埴輪棺墓に対する言及は、県史や市町村史、あるいは発掘調査報告書など限られた紙幅の中で行なわれたものが多いこともあって、いまだ十分な検討がなされているとはいいがたい。

## 2. 埴輪棺墓の特徴と造墓年代

埼玉県では、現在のところ、25遺跡から36例の埴輪棺墓が検出されている(第1表)(註3)。これらは、北武蔵台地から比企丘陵にかけて密に分布しており、多くが台地や丘陵の端部とその周辺に立地する。県西部の山地には認められず、東部の低地でも分布は希薄である(第1図)。

埴輪棺墓に納められた埴輪棺には、特別に製作されたことが明らかな特製棺は認められず、いずれも転用棺であると思われる(註4)。棺材とされるのは、おもに普通円筒埴輪である。朝顔形円筒埴輪を用いた事例も存在するが、それらはいくまでも客体的な使用にとどまり、棺を主体的に構成するのは、やはり普通円筒埴輪である。

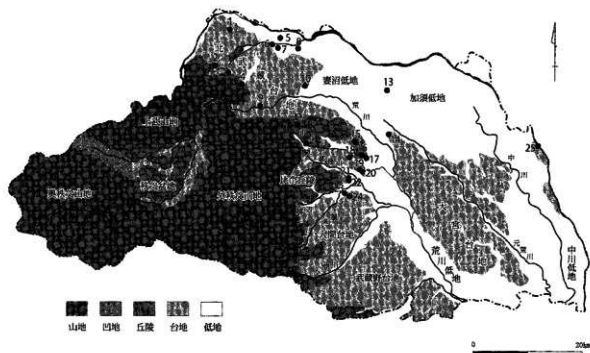
棺を構成する円筒埴輪には、2条突帯3段構成、3条突帯4段構成、4条突帯5段構成、5条突帯6段構成の規格があり、2条突帯3段構成や3条突帯4段構成の小型品が多用される。

なお、埼玉県の古墳には、墳形や墳丘規模に応じた埴輪規格の使い分けが存在した可能性が指摘されており(増田1987b)、その点、樹立古墳が多い小型品は入手が容易であり、大型品ほど入手

第1表 埼玉県内の埴輪棺墓一覧

No.	遺構	検出位置	墓 塚 規模(m) (平面形)	椁長 (m)	埴輪棺蓋の種類	
					椁使用 埴輪規格	棺体の組み合わせ
1	寺浦1号古墳埴輪棺墓	南側開溝外縁部	—	—	—	合わせ口
2	長沖古墳群196号墳埴輪棺墓	前方部前埴輪部	1.2×0.65 (楕丸形)	約80	2条3段	合わせ口
3	俣山王遺跡第13号古墳埴輪棺墓	南東側開溝外縁部	有(使用期) 規模不明	—	2条3段	押し込み
4	羽黒山第7号古墳埴輪棺墓	東側墳丘裾部	有	128	2条3段	合わせ口
5	下手針西浦遺跡1号埴輪棺墓	2号墳の開溝外	有(横円)	86	2条3段	合わせ口
	下手針西浦遺跡2号埴輪棺墓	古墳群中	有(横円)	54	2条3段	押し込み
6	原ヶ谷戸遺跡第1号埴輪棺墓	第3号溝跡の東近く	—	81	3条4段	合わせ口
7	白山古墳群埴輪棺墓	平地	—	—	—	—
	白山12号墳埴輪棺墓	12号墳の開溝内側	—	—	—	—
8	森下遺跡第1号埴輪棺墓	第1号古墳の墳丘裾	1.23×0.82 (楕円)	90	2条3段 3条4段	合わせ口
9	小前田古墳群3号墳埴輪棺墓	2号墳と3号墳の間	1.02×0.54 (横円)	残存長33	2条3段か	—
10	用土北沢遺跡7号墳埴輪棺墓	7号墳周辺	—	—	2条3段	—
11	鹿田第7号墳埴輪棺墓	北側墳丘内	0.77×0.46 (楕円)	約60	2条3段	押し込み
12	月の輪古墳群1号埴輪棺墓	6号墳の北	1.68×0.83 (長方形)	97	2条3段	合わせ口
	月の輪古墳群2号埴輪棺墓	7号墳の南側墳丘裾部	0.89×0.47	78	2条3段	合わせ口
	月の輪古墳群3号埴輪棺墓	5号墳の南東側墳丘裾部	1.18×0.51 (長方形)	78	2条3段	合わせ口
	月の輪古墳群4号埴輪棺墓	55号墳の北東側の墳丘裾部テラス面	1.05×0.46 (不整形)	82	2条3段	合わせ口
	月の輪古墳群5号埴輪棺墓	55号墳の北東	1.72×0.74 (不整形)	76.8	5条6段	単体
	月の輪古墳群6号埴輪棺墓	54号墳の南西側墳丘裾部	—	80	2条3段	合わせ口
13	北大竹遺跡埴輪棺墓	—	—	—	—	—
14	新屋敷遺跡埴輪棺墓	新屋敷4号墳と5号墳の間	1.36×0.9 (楕円)	114	2条3段 3条4段	合わせ口 押し込み併用
	新屋敷39号墳第1号埴輪棺墓	北側開溝外1.7m	有	113	4条5段	合わせ口
15	田甲原埴輪棺墓	田甲の遺跡	不明	130	5条6段	単体か
16	大行山2号墳埴輪棺墓	不明	—	—	—	—
17	久米田古墳群3号古墳埴輪棺墓	古墳址外側	1.5×0.5	150未満	2条3段 3条4段	4個の内周埴輪を 組み合わせる
18	下松4号墳埴輪棺墓	南東側墳丘裾部	0.9×0.4	78	2条3段	合わせ口
19	柏崎2号墳埴輪棺墓	東側墳丘	有	110	3条4段	合わせ口
20	古津堤岸原遺跡埴輪棺墓 (第215号土壌)	開溝東側外縁部ないし開溝内	1.26×0.88 (不整形楕円)	81	2条3段	合わせ口
21	廣助山古墳群7号開溝埴輪棺墓	開溝内側1、開溝外側1、開溝底3	有	不明	5条6段	—
22	毛塚32号墳第1号埴輪棺墓	毛塚32号墳の北開溝外縁	有 1.5×0.4 (長方形)	112	2条3段 3条4段	合わせ口 押し込み併用
23	北峰18号墳埴輪棺墓	不明	—	—	—	—
24	新町1号墳埴輪棺墓	西側	—	—	—	—
25	目沼10号墳埴輪棺墓	東側くびれ部墳裾	有	61	2条3段	押し込み

透孔等閉塞方法	人骨 副葬品	埴輪 年代	副葬古墳の特徴					築造年代	文献
			埴輪 樹立	墳形	墳丘規模 (m)	埋葬施設			
埴輪片で閉塞	×	6世紀中葉	人物 馬	円	約10	—	6世紀中葉	1	
埴輪片で閉塞	×	6世紀前半	○	前方 後円	不明	—	6世紀前半	2	
口縁部は板石で閉塞	×	6世紀中葉	○	円	20.5	—	6世紀中葉	3	
—	—	6世紀後半	○ (少量)	円	不明	横穴式 石室か	6世紀後半	4	
埴輪片で閉塞	鉄製品 (数珠か)	6世紀前半	×	円	約12.4	—	6世紀前半	5	
埴輪片で閉塞	×	6世紀前半	—	—	—	—	—	5	
埴輪片で閉塞	×	6世紀前半	—	—	—	—	6世紀前半	6	
—	—	不明	—	—	—	—	不明	7・8	
—	—	不明	○	円	約20	—	6世紀前半	7・8	
埴輪片で閉塞	×	6世紀前半	○	円	18程度	—	6世紀前半	9	
—	×	6世紀前半	—	円	—	横穴式 石室	6世紀後半	10	
棺の小口は埴輪片で閉塞	—	5世紀後半	○	円	18.7	—	5世紀後半	11	
埴輪片で閉塞	×	5世紀後半	○	円	13.5	—	5世紀後半	12	
2条3段の普通円筒及び 5条6段の瓶頸形埴輪片で閉塞	×	6世紀初頭	×	円	14.5 ×13.2	横穴式 石室	7世紀初頭	13	
埴輪片で閉塞	×	5世紀後半	○	円	13.7 ×13.4	—	6世紀初頭	13	
埴輪片で閉塞	×	6世紀初頭	○	円	15.1 ×15.4	—	6世紀初頭	13	
円筒埴輪片と馬形埴輪片で閉塞	×	6世紀初頭	○	帆立貝	24.6	—	6世紀初頭	13	
両端を複数の河原石で閉塞	×	6世紀初頭	○	帆立貝	24.6	—	6世紀初頭	13	
埴輪片で隙間を挿填	×	6世紀初頭	○	円	18.5 ×18.6	—	6世紀初頭	13	
—	—	—	—	—	—	—	—	14	
透孔と底部は埴輪片で塞ぎ、粘土で固定	×	6世紀前半	4号埴 ○	円	約20	—	6世紀前半	15	
埴輪片で塞ぎ、灰白色粘土で入念に被覆	×	6世紀中葉	×	円	15.92	—	6世紀初頭	16	
不明	—	不明	—	—	—	—	—	17	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	
埴輪片で閉塞か	×	—	—	円	—	—	—	17	
—	×	6世紀中葉	○	円	13.5	—	6世紀中葉	18	
他の円筒埴輪片で閉塞	×	6世紀中葉	×	円	東西径11.5 ×南北径14.5	横穴式 石室	6世紀中葉	19	
—	×	5世紀後半	○	円	東西17.6× 南北17.2	—	5世紀後半	20	
—	—	6世紀前半	×	円	約20	—	6世紀前半	21・22	
埴輪片で閉塞	×	6世紀前半	○	円	20以下	—	6世紀前半	23	
—	—	—	×	円	16前後	—	—	24	
—	—	—	×	前方 後円	約67 (残存長)	—	—	24	
埴輪片で閉塞	×	6世紀前半	円筒 埴輪片	帆立貝	46以上	—	6世紀前半	25	



第1図 埼玉県における墳輪柏墓の分布

が困難だったと考えられる。

墳輪棺の多くは、こうした円筒墳輪を複数個体組み合わせられて構成されている。なお、滑川町の月輪古墳群では5条突帯6段構成の大型円筒墳輪1個体のみを用いたと想定される墳輪棺が検出されている(滑川町月輪遺跡群発掘調査会2008)。このほかにも大型型を用いる事例では、円筒墳輪が単体で用いられた可能性があるが、いずれの検出例も出土状況が明確でなく、実態は不明である。

棺体となる円筒墳輪の組み合わせ方は、合わせ口タイプ、押し込みタイプ、合わせ口押し込み併用タイプの3タイプに大別できる(第2図)。最も類例が多いのは円筒墳輪2個体を合わせ口にしたものであり、押し込みタイプや合わせ口押し込み併用タイプは類例が少ない。これら各タイプの分布には顕著な特徴が認められないことから、組み合わせ方に地域性は指摘できない。

透かし孔をはじめ、円筒墳輪の解放部分の閉塞には墳輪片を用いるものが多く、なかには粘土で隙間を埋めるなどより入念に閉塞したものも認められる。また、これ以外に石材を用いる例がある。

墳輪棺の法量は、いずれも1.5m未満であり、その中では50~80cm、100~130cmの法量に集中することが指摘できる(註5)。

墳輪柏墓は、古墳の周辺につくられたものが多く、検出位置には、墳丘内、周溝内縁、周溝底、周溝外縁および周溝外、その他が認められる。古墳に隣接して1基つくられるものが多いが、諏訪山古墳群7号周溝では5基の墳輪柏墓が検出されており、検出位置にはヴァリエーションがある。

墳輪棺の埋設方法は判然としないうものも少なくないが、発掘調査で何らかの施設が確認された事例では多くが素掘りの土壌を掘り、その中に墳輪棺を納めていた。土壌の平面形は、楕円形や長方形、隅丸方形などであり、規模は長さ1.02~1.72m、幅0.4~0.9mを測る。なお、これらには土壌の底に土砂を敷いた上で墳輪棺を設置したものが認められ、こうした造作により棺の安定を図ったものと思われる。また、素掘りの土壌以外に石材を用いた事例が後山王13号墳の周辺で確認されている。これは素掘りの土壌の内周に河原石と見られる拳大の亜円礫を施すもので、その中に挿

し込みタイプの埴輪棺が納められていた。本例では、棺の小口（円筒埴輪の口縁部側）の閉塞に板石が用いられていた。

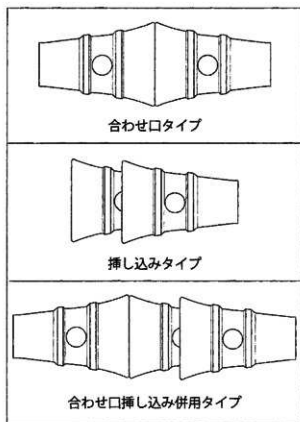
棺の長軸方向は一定しない（第3図）。このことから埴輪棺の埋設に際して特定の方が意識されていた可能性は低いと考えられるが、一方で、隣接する古墳に棺の側面を向けて納められたものがあることは、埴輪棺が古墳を意識して埋設された可能性を考えさせる。

副葬品が確認された例は深谷市下手計西浦遺跡1号埴輪棺墓が唯一であり、ここからは鉄製の可能性が指摘される鉄製品が出土している。

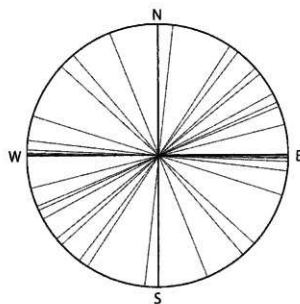
いずれの事例でも人骨等は確認されていない。

埴輪棺墓の検出位置に隣接し、埴輪棺墓との関係が想定できる古墳には円墳が多く、ほかに前方後円墳と帆立貝式古墳がある。墳丘規模は、前方後円墳および帆立貝式古墳では墳丘長40～70m程度、円墳では直径10～20m程度のものが多い。埋葬施設は、ほとんど不明だが、横穴式石室を持つものも認められる。外表施設として埴輪を持つものと持たないものがある。

ところで、埴輪棺墓をめぐる問題の一つに造墓年代がある。埴輪棺墓は副葬品をほとんど持たないことから、造墓年代を絞り込むことが難しいことが、これまでも幾人かの研究者によって指摘されてきた（笠井1987など）。しかし、埴輪棺墓は棺材となった埴輪の年代を基準として、それ以後の造墓であることが確実であるし、また、多くが古墳の周辺埋葬のかたちをとる埼玉県内の事例の場合には、隣接する古墳の築造年代も目安として有効であると考えられる。そこで、埼玉県の埴輪棺墓について、棺材である埴輪の年代と隣接古墳の築造年代を調べてみると、埴輪の年代、隣接古墳の年代とも6世紀前半を中心とした時期に集中していることが指摘できる（第1表）。多くの事例から導き出したものであることから、こうした年代の集中は偶然の結果とは考え難く、当



第2図 棺体の組み合わせ



第3図 埴輪棺の長軸方向

該期に埴輪棺墓の造墓が盛行した可能性が高い。これを踏まえると、当該地域では、5世紀後半に埴輪棺墓が導入され、6世紀前半を中心とする盛行期を経て、6世紀後半～7世紀初頭までつくられたことが指摘できる。こうした想定は、比企地方の埴輪棺が6世紀前半を中心とした時期に用いられたとする若松良一の見解(若松1987)とも齟齬しない。

### 3. 埴輪棺墓の被葬者像

埴輪棺墓の研究では、その被葬者像にとりわけ高い関心が寄せられてきた。埴輪棺墓の被葬者像をめぐっては、これまで埴輪製作集団との関係を想定する意見が多くの研究者によって示されてきたが(春成1977、橋本1980、坂1994、間壁1995ほか)、近年は殉葬の可能性(高橋1996・2010)も含め、被葬者像の多様性が強調される傾向にある(清家1999、鈴2014)。

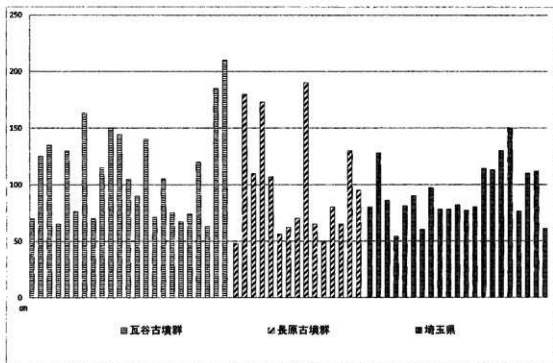
では、本稿の検討対象である埼玉県埴輪棺墓の被葬者は如何なる人物であろうか。

こうした問題を考えるうえで、先行研究におい

て、とくに重視されてきたのが埴輪棺の棺長であり、埼玉県の埴輪棺では棺長が50～80cmと100～130cmに集中することを先に述べた。

では、他地域の事例ではどうだろうか。ここでは、まとまった資料が出土している京都府の瓦谷古墳群と大阪府の長原古墳群の事例を比較対象として取り上げたい。

さて、第4図の棒グラフは、瓦谷古墳群と長原古墳群、そして埼玉県で検出された埴輪棺の棺長を示したものである。これを見ると、瓦谷古墳群と長原古墳群には、埼玉県では確認できない棺長が150cm前後あるいはそれを上回る事例も存在するが、それら以外については、棺長が50～80cmと100～130cmに集中するという埼玉県の事例と同様の特徴が認められる。埼玉県の事例が古墳時代後期を中心とした時期のものであるのに対し、瓦谷古墳群の事例は古墳時代前期～中期前半、長原古墳群の事例も中期のものであり、年代が大きく異なる。また、埼玉県と瓦谷古墳群、長原古墳群では棺材である埴輪の大きさも著しく異なる。



第4図 埴輪棺棺長の比較

それにもかかわらず、棺長に共通の特徴が認められることは、埴輪棺の棺長が時代や地域の違いに関係のないより普遍的な要素によって決定されるものであったことを示していると考えられる。筆者はその要素が被葬者の身長であったと考えるが、仮にこうした考えが首肯されるならば、出土人骨から導き出された関東の古墳時代人の平均推定身長が、成人男性で163.06cm、成人女性では151.53cmであるとされることからしても(平本1981)、埼玉県の埴輪棺墓の被葬者としては成人を想定しがたく、被葬者は乳幼児や小児であった可能性が高いと考えられる。長谷古墳群と長原古墳群における棺長1.5m以上の大型の埴輪棺は、両遺跡において埴輪棺墓への成人の埋葬がおこなわれたことを示すものかもしれない。

以上、埴輪棺の棺長の検討からは、埼玉県の埴輪棺墓の被葬者が成人ではなく、乳幼児や小児である可能性の高いことが知られた。検出された埴輪棺墓の多くが古墳の周辺、あるいは墳丘内につくられているところからみて、これら埴輪棺の被葬者は隣接する古墳の被葬者と密接な関係にあったことが窺える。したがって、埴輪棺の被葬者を考える上では、隣接古墳の被葬者像も検討する必要がある。しかし、これらの古墳は多くが埋没古墳であるため埋葬施設や副葬品が判明するものが少なく、そうした要素による検討が困難な場合が少なくない。そこで、ここでは、やや異なる視点から隣接古墳の被葬者や埴輪棺墓の被葬者にアプローチを試みる。

なお、埴輪棺墓の被葬者については、これまでにも多くの研究者が埴輪製作集団との関係を想定してきた。かつて、橋本博文は埴輪棺墓の被葬者像を検討した際、埴輪棺墓が土師氏伝承地やその周辺に多く認められることを指摘したが、同時に埴輪製作集団の存在をより直接的に示す埴輪製作址の存在にも注目している(橋本1980)。

埼玉県は、埴輪生産を直接的に示す埴輪窯跡が

全国的にも多く確認されている地域であり(埼玉県立さきたま史跡の博物館2014)、こうした検討を行うには恵まれた地域といえる。そこで、本稿でもこの視点に学び、分布論的視点から埴輪棺墓と埴輪製作集団との関係を検討する。

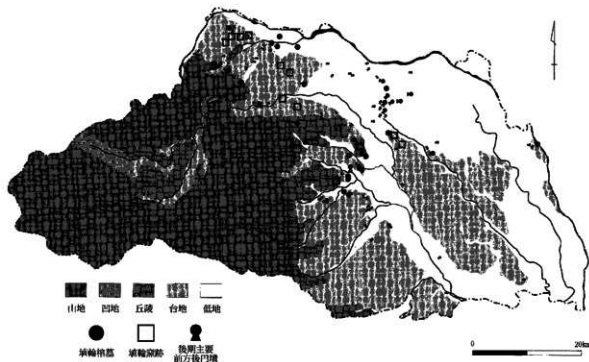
さて、第5図には、埼玉県での埴輪棺墓と埴輪窯跡、そして古墳時代後期に築かれた主要前方後円墳の分布状況を示した。これを見ると、埴輪棺墓が埴輪窯跡の周辺に分布することが指摘できる。埴輪棺墓が埼玉県における埴輪の一大消費地であり、棺材となる埴輪の入手が比較的容易であったと考えられる埼玉古墳群の周辺に少なく、一方で埴輪窯跡の周辺に多数存在することは、やはり埴輪棺墓と埴輪製作集団との関係の深さを考えさせる。

なお、こうした関係が想定できる好例として鴻巣市の生出土塚遺跡と新屋敷古墳群を挙げることができる(第6図)。

生出土塚遺跡は、現在までに埴輪窯跡40基、工房跡2基、粘土探掘壕1基、住居跡9軒などが検出されている県内でも有数の埴輪製作遺跡である。一方、新屋敷古墳群は、生出土塚遺跡の北側に隣接する古墳群であり、その立地や造営年代からは、生出土塚遺跡との密接な関係が読み取れる。

埼玉県で埴輪棺墓の造墓が盛行した古墳時代後期には、古墳の被葬者層がそれ以前には古墳に埋葬されることになかった階層にまで広がったことが指摘されている。こうした後期古墳の被葬者の中には嚴治集団など工人集団の構成員も含まれていた可能性が示唆されているが(花田1989)、同様に当該期には、埴輪製作集団の構成員もまた古墳に埋葬された可能性が想定されている。

埼玉県内の例では、墳丘をめぐる埴輪列の要所に多条突帯の円筒埴輪が樹立されていた神川町の諏訪ノ木古墳の被葬者として、埴輪生産に関わる人物を想定するべきことが指摘されているし(日高2011)、先に触れた新屋敷古墳群についても



第5図 埴輪棺墓・埴輪窯跡・後期主要前方後円墳の分布

「生出家で活動した工人集団の墓地」とする見解があり（城倉 2008）、被葬者として埴輪製作集団が想定されている。

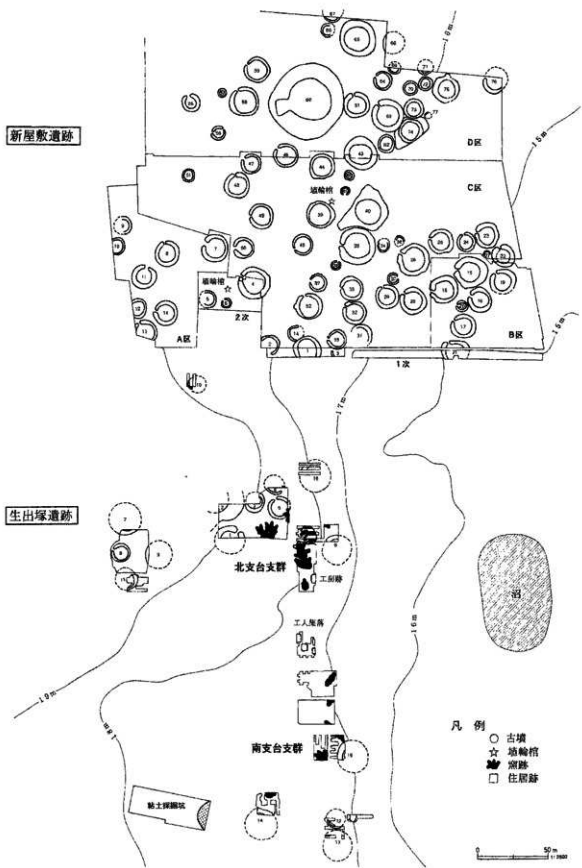
諏訪ノ木古墳は、神流川扇状地（本庄台地）上の段丘縁部に立地する墳丘径 14 m 前後の円墳であり、出土した埴輪の特徴から 6 世紀第 3 四半期の築造が想定されている（神川町教育委員会 1994）。この規模の古墳が 6 条突帯 7 段構成の大型円筒埴輪を少数とはいえ樹立していることは、被葬者が埴輪生産に関わっていたことを考えた方が理解しやすい。そして、こうした理解が許されるならば、多くが円墳であり、墳丘規模が諏訪ノ木古墳と近似する埴輪棺墓隣接古墳の被葬者として工人集団の構成員を想定することもあながち間違っていないだろう。先に示した埴輪窯跡との分布の共通からも埴輪製作集団を想定するのが最も妥当なように思われる。諏訪山古墳群 7 号周溝や毛塚 32 号墳隣接地、田甲原遺跡で出土した埴輪棺の棺材に多条突帯の大型円筒埴輪が用いられていたことも被葬者と埴輪生産との関係を考えれば、説明が見つかるのではないだろうか。

以上、埼玉県の埴輪棺墓の被葬者は多くが埴輪生産に関わる古墳被葬者と密接なつながりを有する乳幼児や小児であったと考えられる。そして、埴輪棺墓と古墳のあり方からは、被葬者どうしが近親者であるなど近い関係にあったことが窺える。

なお、後期古墳には被葬者の職掌を象徴する器物が副葬される場合のあったことが知られており、たとえば、鉄滓の副葬には製鉄や鍛冶に従事したことの象徴が、また製塩土器の副葬には塩生産に従事したことの象徴が表されているとされる。さらに、被葬者の職掌は棺にも反映されていた可能性が指摘されており、古墳時代後期には、それぞれの職掌に応じて副葬品や棺の選択がおこなわれていたことが想定されている（菱田 2007）。こうした状況からは、埴輪棺もまた被葬者の職掌を象徴する器物として採用されたことが考えられよう。

本稿では、埼玉県の埴輪棺墓の被葬者が埴輪製作集団と関係の深いことを指摘したが、このような理解が許されるならば、埴輪棺は、被葬者やそ





第6図 生出塚遺跡と新屋敷古墳群

の帰属集団が埴輪生産に従事したことの象徴として採用されたことも考えられ、そこに埴輪棺を採用することの意義が読み取れるのである。

おわりに

本稿では、埼玉県の埴輪棺墓を集成し、特徴を明らかにした上で、その被葬者像を検討した。

その結果、埼玉県の埴輪棺墓の被葬者は多くが、埴輪製作集団との関係を有する乳幼児や小児であり、埴輪棺はその職掌を象徴する器物として採用された可能性を指摘できた。

近年、埴輪棺墓の被葬者の多様性が強調される中、近畿地方では、埼玉県で多く認められた周辺埋葬型の埴輪棺墓と埴輪製作集団とが無関係であるとの見解も示されており（清家 1999）、近畿地方と関東地方では、埴輪棺墓の性格が異なっていた可能性もある。今後、比較研究が必要であるが、本稿では、その比較材料を提示できたと考えらる。

なお、本稿は、粗削りな議論に終始した感が強い。研究の進展のためにも本稿に対する多くの温

かいご批判を賜れば、幸いである。

註1 1970年代までの研究史については、橋本博文の論文「円筒棺と埴輪棺」を参照されたい。

註2 関東に多くの事例が分布することは、早くから橋本により指摘されている（橋本 1980）。

註3 これまでに確認された埴輪棺の総数が全国的に見ても 500 例に満たず、そのうちの 7 割強が近畿地方に分布することからすれば（野崎 2011）、36 例という数はきわめて多いと言える。

註4 なお、滑川町月輪古墳群で検出された埴輪棺のうち、5 条突帯 6 段構成の大型円筒埴輪を用いた 5 号円筒埴輪棺については、報文中で特製品である可能性が指摘されている（市川 2008）。しかし、この規格の円筒埴輪は古墳に樹立されることもあり、形態的特徴からは、製作段階において埴輪棺用に特別につくられたものとはいえないと考える。

註5 なお、細かな数値は不明だが、1.5 m 未満とされる久米田古墳群 3 号古墳址の隣接地で検出された埴輪棺（金井塚 1978）も後者の範疇で捉えて良いものだろう。

#### 引用参考文献

- 有井広幸 1996 「瓦谷遺跡群における埴輪棺の展開についての一考察」『京都府埋蔵文化財論集』第 3 集 pp.181 - 187 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 石井清司 1995 「瓦谷遺跡の埴輪棺再考」『京都府埋蔵文化財情報』第 56 号 pp.26 - 36 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 石井清司・有井広幸 1994 「瓦谷遺跡の埴輪棺」『京都府埋蔵文化財情報』第 51 号 pp.1 - 19 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 宇都宮市教育委員会 2013 『うつのみやのハニワ大集合—宇都宮の埴輪の変遷を考える—』
- 笠井敏光 1987 「埴輪の再利用」『季刊考古学』第 20 号 pp.33 - 37 雄山閣
- 金井塚良一 1978 「特殊な埴輪」『吉見町史』上巻 pp.167 吉見町町史編さん委員会
- 神川町教育委員会 1994 『庚申塚遺跡・愛染遺跡 安保氏館跡・諏訪ノ木古墳』神川町教育委員会文化財調査報告 第 11 集
- 川口修実 2000 「畿内における埴輪棺の展開についての一試論」『古代学研究』149 pp.1 - 22 古代学研究会
- 小宮延幸 1995 「埴輪棺試論 I—奈良県葛城石光山古墳群の分析からみた埴輪棺—」『滋賀考古』第 14 号 pp.18 - 33 滋賀考古学研究会
- 近藤義郎 1983 「部族の構成」『前方後円墳の時代』pp.232 - 275 岩波書店

- 埼玉県立さきたま史跡の博物館 2014 『平成 26 年度企画展 ハニワの世界』
- 櫻井久之 1994 「埴輪棺に埋葬された人々—大阪府長原古墳群例の検討—」『文化財論集』pp.583 - 592  
文化財論集刊行会
- 城倉正祥 2008 「北武蔵における埴輪生産の定着と展開」『古代文化』第 60 巻第 1 号 pp.97 - 107  
古代学協会
- 鈴 千夏 2014 「馬見古墳群における階層秩序」『平成 26 年度春季企画展 ヤマト王権と葛城氏—考古学からみ  
た古代氏族の盛衰—』pp.132 - 137 大阪府立近つ飛鳥博物館
- 清家 章 1999 「古墳時代周辺埋葬墓考—畿内の埴輪棺を中心に—」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研  
究室 10 周年記念論集—』pp. 231 - 260 大阪大学考古学研究室
- 高橋克壽 1996 「埴輪の棺」『歴史発掘 9 埴輪の世紀』pp.120 - 121 講談社
- 高橋克壽 2010 「山陰の古墳時代前期埴輪の特質」『遠古登攀—遠山昭登君追悼考古学論集 pp.375 - 387  
『遠古登攀』刊行会
- 瀧澤芳之 1986 「結語 小前田古墳群について」『小前田古墳群国道 140 号バイパス関係 (寄居町・花園町工区)  
埋蔵文化財発掘調査報告—V—』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp.129 - 142
- 田中涼子 1997 「円筒棺にみる階層性」『古事』天理大学考古学研究室紀要第 1 冊 pp.25 - 34  
天理大学考古学研究室
- 伝田郁夫・江原昌俊・城倉正祥 2011 「統比企の埴輪」『埴輪研究会誌』第 15 号 pp.55 - 77 埴輪研究会
- 永井智教 1996 「下手計西浦遺跡の古墳群について」『下手計西浦遺跡 付 木の本 13 号墳』埼玉県深谷市埋蔵  
文化財発掘調査報告書第 48 集 pp.112 - 120
- 長瀬謙康 2005 「石組以外の小規模埋葬施設と埴輪棺」『広木大町古墳群後山王地区 後山王遺跡 E 地点』(『美里  
町遺跡調査報告書』第 6 集) pp.153 - 154
- 野崎貴博 2002 「埴輪棺墓の群構成—中国地方の事例の検討から—」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集  
—』下巻 pp.221 - 238 古代古備研究会
- 野崎貴博 2011 「中四国の埴輪棺と地域間の交流」『埴輪から見た中期古墳の展開』pp.1 - 10  
中国四国前方後円墳研究会
- 橋本博文 1980 「円筒棺と埴輪棺」『古代探叢—滝口宏先生古稀記念考古学論集—』pp.279 - 316  
早稲田大学出版部
- 花田勝広 1989 「倭政権と鍛冶工房—畿内の鍛冶專業集落を中心に—」『考古学研究』第 36 巻第 3 号  
考古学研究会
- 春成秀樹 1977 「埴輪」『考古資料の見方』〈遺物編〉pp.195 - 245 柏書房
- 坂 靖 1994 「古墳時代の「従属葬」をめぐって」『考古学と信仰』pp.393 - 411  
同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 菱田哲郎 2007 「郡民制と手工業生産」『古代日本国家形成期の考古学』(『諸文明の起源』14) pp.131 - 135  
京都大学学術出版会
- 日高 慎 2011 「毛野の影響圏としての北武蔵—埼玉古墳群を中心として—」『古墳時代毛野の実像』pp.92 -  
100 雄山閣
- 平本嘉助 1981 「骨からみた日本人身長の変り変わり」『考古学ジャーナル』No 197 pp.24 - 28  
ニュー・サイエンス社
- 間壁霞子 1995 「特殊器台棺と初期円筒棺」『神戸女子大学文学部紀要』28 巻第 1 分冊
- 増田逸朗 1987a 「埴輪の機能と祭式」『新編埼玉県史』通史編 1 原始・古代 pp.332 - 335
- 増田逸朗 1987b 「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』pp.401 - 421 新人物往来社
- 大和 修 1993 「杉戸町日沼 10 号墳出土の円筒埴輪棺について」『調査研究報告』第 6 号 pp.27 - 32

埼玉県立さきたま資料館

若松良一 1987 「比企地方における埴輪の受容と展開—武蔵国の円筒埴輪編年を通して—」『諏訪山33号墳の研究』  
pp.67 - 83

遺跡文献

1. 上里町史編集専門委員会 1992 『上里町史』資料編 上里町
2. 太田博之 2014 『長沖古墳群XⅢ—第194・195・196・197・201号墳の調査—』  
本市埋蔵文化財調査報告書第39集
3. 長瀧歳康 1992 『後山王遺跡—B・D地点—』美里町遺跡調査会報告書第1集
4. 長瀧歳康 1991 『白石古墳群・羽黒山古墳群』美里町遺跡発掘調査報告書第7集
5. 永井智教・青木克尚・古池智裕 1996 『下手計西浦遺跡付木の本13号墳』  
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第48集
6. 村田章人 1993 『原ヶ谷戸・滝下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第127集
7. 柳田敏司・菅谷浩之 1974 『岡部町白山遺跡第二次調査』『第7回遺跡発掘調査報告会発表要旨』  
埼玉考古学会ほか
8. 菅谷浩之 2004 『白山古墳群の形成と壘穴遺構』『幸魂（さきみたま）—増田逸朗氏追悼論文集—』  
北武蔵古代文化研究会
9. 知久裕昭 2009 『森下遺跡（第2次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第103集
10. 瀧瀬芳之 1986 『小前田古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集
11. 石塚三夫 2000 『用土北沢遺跡（3次）』寄居町文化財調査報告第23集
12. 今井宏・井上尚明・立石盛詞・酒井和子 1984 『扇田・寺ノ台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第32集
13. 市川康弘 2008 『月輪遺跡群』滑川町月輪遺跡群発掘調査会
14. 埼玉県教育委員会 2013 『埼玉県埋蔵文化財調査年報』平成23年度
15. 鴻巣市市史編さん調査会 1989 『鴻巣市史』資料編1 考古 埼玉県鴻巣市
16. 金子直行・大谷徹・西井幸雄・書上元博 1996 『新屋敷遺跡C区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書  
第175集
17. 吉見町町史編さん委員会 1978 『吉見町史』上巻 吉見町
18. 江原昌俊・長井正欣 2004 『上松本遺跡（第2次）』東松山市遺跡調査会発掘調査報告書第2集
19. 渡辺久生・金井塚厚志 1979 『笹塚遺跡—野本東部遺跡群発掘調査概報—』
20. 村田建二 1984 『埋蔵文化財発掘調査報告書—Ⅱ—古凍根岸裏』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第37集
21. 埼玉県教育委員会 1983 『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和56年度
22. 伝田郁夫・江原昌俊・城倉正洋 2011 『続比企の埴輪』『埴輪研究会誌』第15号 埴輪研究会
23. 大谷徹 2006 『杉の木遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団第323集
24. 坂戸市教育委員会編 1992 『坂戸市史』古代史料編
25. 大和修 1993 『杉戸町目沼10号墳出土の円筒埴輪箱について』『調査研究報告』第6号  
埼玉県立さきたま資料館

**研究紀要** 第29号

2015

平成27年3月25日 印刷

平成27年3月31日 発行

発行 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

<http://www.saimaibun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 巧和工藝印刷株式会社